

## 都市空間における「緑」のデザインの歴史的展開に関する研究

A historical study on the green-scape design in urban areas

代表研究者 東京大学農学部助手 下村 彰 男  
Kes. Assoc., Faculty of Agriculture, Univ. of Tokyo  
Akio SHIMOMURA

This study aims at pointing out the problems of the green-scape design in modern cities and finding the way to the solution. At first, the historical transition, concerning the forms and the ideas of the green-scape design, is made clear by studying the examples and the literature from the later Edo era up to the present day. This transition is divided into 8 periods. And the modern green-scape designs are grouped into 4 types, and 5 problems are pointed out. Further there are 2 intentions to regulate the modern green-scape designs: to decorate cities and to introduce nature into cities by planting trees. The strength and the expression of each intention has changed to the social situations, but, in the matured periods, both intentions are needed.

### 研究目的

近年、緑や水などによる都市空間整備が盛んであるが、その一方で効果の薄いあるいはマイナス効果の整備も増えている。これは、これまでの中心課題が自然的要素の量的・空間的確保であり、その質やデザイン（保全をも含む）に関する検討が十分でなかったことによると考えられる。

そこで本研究は自然的要素の中でも最もなじみ深い「緑」を取り上げ、都市空間におけるデザインの基本的考え方を検討するための資料とすべく、以下の3点を目的とした。

①現状における「緑」のデザインの考え方やその問題点を整理、把握する。

②近世後期から現代に至る「緑」のデザインの系譜を整理し、現状を歴史の中で位置づける。

③歴史の中に「緑」による都市環境デザインの考え方のヒントを見いだす。

### 研究経過

研究は以下の二面から進めた。

(1) 東京および周辺地域の業務地、商業地、住宅地において収集した「緑」のデザイン事例(写真)をもとに、研究協力者とともに、ブレインストーミングを行い、その考え方の整理を行うと

もに、問題点に関しても検討を行った。

(2) 近世後期および近代の都市における「緑」のデザインの考え方や、その形態について、絵図、写真、図面、そして先駆的な役割を果たした人々の著作、論文などから検討し、その系譜を整理した。

具体的には、都市空間のうち街路系空間、建築系空間、駅前空間を取り上げ、空間毎に事例の形態及び設計の指針を分析し、時代区分と各時代の形態上の特徴を整理した。分析の項目は、樹種、樹形、配植、中下木や地被等の垂直構成、量の5点を共通項目とし、その他各空間毎に特徴的な項目を設定し分析を行った。また、空間毎に関連論文より、デザインの目的や価値を抽出し、植栽デザインを規定した各時代の基本的な考え方について検討した。

### 研究成果

(1) 「緑」のデザイン・ボキャブラリーと問題点

収集した現代都市における「緑」のデザイン事例を整理し、29のデザイン・ボキャブラリーを抽出した。これらは更に以下の4タイプに大別された。

①「時」のデザイン：エイジングや季節性など、形態や空間の変遷・形成から時間の推移を認識させ、「時」を感じさせるデザイン

②「気」のデザイン：ビオトープやゲニウス・ロキなど、自然の認識を高め、自然とのふれ合いを促進させるデザイン

③「係」のデザイン：添えや呼応など、「緑」と「緑」あるいは「緑」と「人」など、複数のものの関係を操作するデザイン

④「象」のデザイン：並木や領域植栽など、形を有する装置としてのデザイン。

また、問題点としては以下の諸点が指摘された。

- a. 古典的庭園デザインが無批判に都市空間に持ち込まれている
- b. 都市での「緑」に関しても「自然=大自然の形態」の短絡した図式が見られる
- c. 「緑」の量的確保が無批判に善とされ、不必

要な場にも植栽がなされている

d. 単に平面的な景づくりが重視され、空間形成、活動の場づくりになっていない

e. 空間のコンテクストに応じた植栽が検討されていない

(2)「緑」デザインの考え方および形態の系譜【植栽デザインを規定する基本的な考え方】

デザイン目的の分析の結果、各時代での都市の植栽デザインを規定した基本的な考え方として、都市を修景し、美しく快適な生活空間をデザイン(人為的に形成)しようとする志向と、植栽の生物・生態系としての機能(効用)の発現を高め、都市環境の改善を図ろうとする志向の2面があり、時代毎に両者への傾斜の程度が変化し、植栽デザインの形態を大きく左右してきたことが明らかとなった(→表)。この両者をそれぞれ「修景(D)軸」「緑化機能(G)軸」と名付けた。

都市の緑のデザインの空間別の時代区分(上)

都市の緑のデザインの形態と考え方(下)

年代	1870 HG	1880 20	1890 30	1900 40	1910 T1	1920 T0	1930 S1	1940 10	1950 20	1960 30	1970 40	1980 50	1990 60	1990 R1
街路系空間	近世植栽期	導入移行期	模倣期	都市美期	戦前成熟期	復興・発展期	都市緑化期	都市景観期						
建築系空間	近世植栽期	導入移行期	模倣期	都市美期	戦前成熟期	復興・発展期	都市緑化期	都市景観期						
駅前空間	近世植栽期	導入移行期	模倣期	都市美期	戦前成熟期	復興・発展期	都市緑化期	都市景観期						

年代	HG	H40	T8	S7	S20	S40	S55		
時代区分	近世植栽期	導入移行期	模倣期	都市美期	戦前成熟期	復興・発展期	都市緑化期	都市景観期	
形態	樹種	松、柳、杉、桜、など	松、桜、柳等 和風樹種	西洋に倣う 落葉広葉樹	西洋樹種常葉 広葉樹とイチョウ	落葉+常緑広葉	郷土種導入 (けり、ヤブ)	常緑広葉樹 緑量と耐性の為	郷土種、花木
	樹形		自然形	次第に整形	整形	整形+自然形	整形、自然形減	自然形(自由繁茂)	自然形(自然風)
	配植		整形	整形	整形	整形主、自然副	整形主、自然形副	自然形	自然形
	地被	土	土	芝	芝	芝+灌木	土→芝+灌木+舗装	中木+灌木	整形灌木
	量	場所に応ず	多少様々	密度少	密度・面積少	中	少(特に駅前)	面積・密度共に多	中
考 え 方	キーワード	(不明)	宏麗、装飾	都市装景	都市美、整一美、建築的 モダニズム	都市美、自然美 林園的、自然・人工両方	都市美、地方色	修景植栽	都市景観、アーティ 視覚的・心理的 イメージ
	頻度								
方 法	キーワード	(不明)	衛生、健康 気候、防塵 防風、酸素	公衆衛生 気候、酸素	空気浄化、 緑陰 (自然を欲す)	緑を多く、 緑陰、厚生 空気浄化	気候緩和、緑陰	公害除去 大気浄化 機能植栽、緑量	ヒートアイランド対策 都市環境
	頻度								

※「考え方」の「頻度」は、その時代の文献の内の何割に、「修景」「緑化機能」への言及があるかを、つまり関心の強さを示す。

### 【時代区分と各時代の概要】

基本的考え方及び形態の分析を通して、近世植栽期、導入移行期、模倣期、都市美期、戦前成熟期、復興・発展期、都市緑化期、都市景観期の8期に区分された。

#### 〈近世植栽期〉

絵図等に見る限り、近世後期における公共的空間への植栽は、現在に見られるほど一般的ではない。むしろ個人の屋敷からのぞく、私有地の植栽が街の景観形成に貢献していたと考えられる。しかしながら、水辺の土手や橋詰、分岐点など交通の要所、神社周辺や城郭など格高の場所、遊興地や景勝地などの名所といった、ノードや人々の集まる場所、つまり都市のイメージ形成に効果的な場所を中心に植栽が施されていたようである。現代に比較すると、単木植栽が多く、塚や高札、井戸などの小施設に添えられるケースが多い。また、常緑樹も多く用いられ、特にマツは格の高さを表したり、花木との混植でコントラストを演出するなど効果的に用いられた。

#### 〈導入移行期〉

街路樹や、前庭植栽、屋上庭園、鉄道の駅前広場など、西洋式の植栽が導入され始めた。しかし、樹種としてはマツやサクラやカエデ等を使い、樹形・配植は庭園風であるなど、和風のデザインであり、近代への移行期と捉えることができる。目的には都市の衛生が多く挙げられているが、実際の形の上では修景志向(D)・緑化機能志向(G)共に弱い。

#### 〈模倣期〉

日露戦争を契機として、壮麗な都市装景への機運が高まり、植栽デザインについての本格的な研究が始まった。西洋の街路樹、庭園樹が導入され、同時に樹形や配植は整形へと変化し始めた。修景志向が強まるが、まだ衛生・気候調節機能への関心が見られる。

#### 〈都市美期〉

大正8年の都市計画法、道路法、市街地建築物法の成立と共に都市の植栽デザインが充実し、「都市美」等各種の雑誌も創刊され関心が高まった。同種、同大、同型の、徹底した整一美が特徴

であり、建築的な緑のデザインを評価していた。この頃から、都市の悪条件に強く樹形が美しいとして盛んにイチョウが植栽され始め、また、「瀟酒」であるとして、街路樹の足元や建築物の前庭などに芝生を導入する例が増え始めた。修景への関心の高まりに反して、緑化機能への関心は非常に薄れた。

#### 〈戦前成熟期〉

第一期の成熟期であり、画一的に整形の修景を施すことに飽き足らず、より総合的に、場所に応じた植栽デザインがなされた。修景だけでなく緑化機能も共に求められ、また美的基準の変化もあり、自然形の整枝や下木の植栽を施すなど、形態は多様化した。

#### 〈復興・発展期〉

事例の形態は戦前の都市美期と似ているが、地方性の演出がなされるなど修景の質に変化が見られる。初めは下木も芝生もなく質素だが、オリンピックに向けて量的に増加した。しかし、駅前広場などでは復興と共に植栽スペースが限られるようになり、よく仕立てられた高密な植栽が多くなった。全体的に修景志向が強くと緑化機能志向が弱い、これは復興した都市を飾る事を主目的としている為と考えられる。

#### 〈都市緑化期〉

都市の環境悪化を背景として、修景的な配慮無しに、公害防止のために可能な限りの緑量の追求がなされた。街路樹などは耐煙性の高木・中木・下木をカーテン状に数列並べた例があり、建築系の空間でも屋上に高木を導入し森を作ることを目指すなど、ほぼ緑化による環境改善一辺倒の時代であり、場所のコンテキスト等は無視された。

#### 〈都市景観期〉

都市景観の重要性が次第に認められ、「量だけでなく質も」考慮した植栽デザインが少しずつなされるようになった。全空間を通じて、緑量は多くなくともすっきりとした自然形が好まれ、樹木の足元の処理や下木の植栽方法などに工夫が見られるようになる。修景志向と緑化機能志向とのバランスがとられる傾向となっている。

二つの表は、空間別に緑のデザインの変遷を示

したものと、時代毎に修景・緑化機能各々への志向の強さおよびキーワードを示したものである。表内の出現頻度は、その時代の何割の文献の中に、修景志向・緑化機能志向を意味する言葉があるかを表している。この表から、修景・緑化機能両志向の強さが、各時期の状況に応じて各々変化したこと、修景志向と緑化機能志向とは、必ずしも背反するものではなく、都市への関心が高まる時代には、両者がバランス良く共に求められるようになることなどが、明らかとなった。そして、この分析結果と先の形態の分析結果を照らし合わせることで、時代毎に修景志向・緑化機能志向へ

のウェイトのかけかたが変化し、形態を変える背景となったことがわかった。

#### 今後の課題と発展

本研究においては従来、十分議論されてこなかった、都市における「緑」デザインの系譜を明らかにした。今後は、この成果の計画的展開を図るべく、植栽地の諸条件（空間のコンテキスト）と形態（デザイン）との最適な対応に関する検討が必要であると考えている。

#### 発表論文

- 1) 「特集 シビック・ランドスケープ」(総活および分担執筆) 緑の読本 (公害と対策臨時増刊) No. 20: p. 106 (1991).